

メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究 —マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニの時間感覚分析のための序論的考察(2)—

A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico
—An Introductory Study of Experimental Methods for Analysis of Time Perception
at the Individual Level of a Mayayucatecan Catholic Community, Mani (2) —

中別府 温和

この小論は、マヤ・ユカテカ社会を時間の視座から分析することを目的とする。人間の思考と行動に根底から影響をおよぼす時間の分析は集団と個人の両面から分析することが望ましい。

これまでマヤ・カトリック社会の時間感覚を集団の断面から分析してきた。聖堂や十字架の歴史と構造、祈りの内容、擬制的親子関係、マヤ儀礼慣習、共有地、などが分析の主な対象である。

本小論では、質問紙(質問大項目2項目)、有意味カード(6枚)とTAT型の有意味写真(2枚)を使用して、時間感覚分析モデルおよび作業仮説にもとづいて個人の断面で時間感覚を分析した。

主な分析結果は次のとおりである。

マニのカトリックは自己把握、太古の神話的事実の現実化、「小さな時間(この世の日常的な時間)」における「大きな時間(キリストの誕生および死ならびにこの世の始まりと終わりなどを含む時間)」の再現(representation)と再統合(reintegration)などの場面で宗教的な理念や教えによる内調整(inner adjustment)を行っている。

また、「聖母マリアと幼子イエス」と「イエス・キリストの磔刑」の写真への反応は、宗教が象徴を通じてその太古性を何千年という巨大な時間のなかで持続させてきていること、聖母マリアおよびイエスに関するきわめて古い知識と宗教的な教えが、時間の経過とともにマニのカトリックの内面に深く定着し、人々の暮らしのすべての面にさまざまな意味を与え続けていることを示している。

キーワード：宗教的文化統合、マヤ、カトリシズム、時間感覚、太古性、内調整、

目次

はじめに

I 個人の断面における時間感覚の分析

II 調査結果(個別聴取調査の事例)

III 個別聴取調査結果の全体像

おわりに

注

はじめに

これまで宗教的文化統合 (religio-cultural integration) という仮説的な考え方を検証してきた。この仮説は、宗教を社会・文化の中心に位置づける。そして、「宗教は社会・文化の或る部分を強く濃く、別の或る部分を弱く薄く色づけている」と考えてこれを分析するのである。宗教が人間の現実の暮らしのすべての面に濃くあるいは薄くしみ出し、社会・文化全体を規制し方向づけているとする作業仮説 (working hypothesis) である。

この仮説は、宗教の太古性、普遍性、理念性という三つの論点を前提としていると言えよう。つまり、宗教の古さ (太古のものごとを何千年という巨大な時間にわたって持続させる)、広さ (個や集団や国を超えて世界に広く開かれていく)、理念による立て直し (神や神聖な存在にまつわる理念や教えによって現実を構成する方法と態度をとる) の三論点である。

宗教的文化統合の考え方にもとづいて調査地マニの時間感覚を集団の断面で取り出すと、その全体像の概要は次のとおりである。なお、次に述べる内容はすべて筆者による調査結果にもとづいているので、それらの根拠は本稿末尾の引用参考文献に一括して提示し、各事実についてそれぞれ根拠を明示することは割愛したことを予めお断りしておきたい¹⁾。

1 中心と四方 (五方)

マニには、太古から中心と四方 (五方) という考え方がある。この思考は考古学・歴史学の史資料も示すように古い²⁾。古代低地マヤの空間構造と社会構造の基本的形態は祭祀センターの位階制、6 辺形首府構造 (マヤの伝統的 4 首府の周囲に 6 辺形の第二次首府が位置し、その周囲に第三次の 6 辺形の首府が位置する 6 辺形構造)、4 区域制 (*tzucul*) であった。

伝統的なマヤの思考様式においては、宇宙は 4 部構造であり、地球は平地で 4 隅を有し、各隅は東を赤、北を白、西を黒、南を黄、中央を緑という仕方で特有の色を持っていた。上述の 4 区域の色もこれに対応する。写真 2 が示すように、かつてユカタンの共同体への四つの入口には、二つの石塊が対面する形で置かれ、この石塊はマヤ暦の儀礼 (ワウエブ *uayeb*) に使用されていた。この伝統儀礼に関係するそれぞれのマヤ年も四方・4 色に結びつけられ、そこではバカップ (*bacab* 空の運搬人・風の神) とチャック (*ch'ac* 雨の神) が四方に 4 色を伴って配置されていた。マヤの四方構造は共同体の構造を規制し、マヤ共同体はツクル (*tzucul*) という区域で 4 分割され、各区域は父系外婚による内婚制を基本としていたのである。

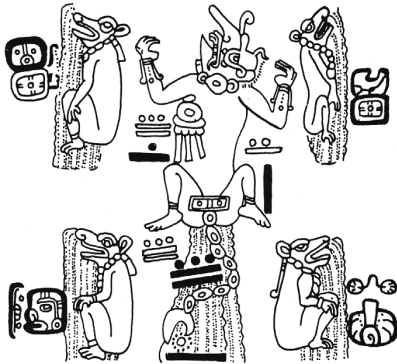


写真1 古代マヤの中心と四方



写真2 マヤの村落共同体の四方の入口に置かれていた石塊と十字架

2 儀礼慣習

1) メン (*men* = Maya medical priest) の祈り

中心と四方(五方)の思考は、伝統医(メン *men* 呪医=祭司)の祈りによって、現在まで保持されてきている。伝統医メンはマヤの伝統的思考を継承し治療と儀礼を行う呪医・祭司である。マニの人々はマヤの伝統によって病気や社会的不安から立ち直っていく。

大地へ供物(サカップ *sak'ap*、バルチェ *balche'* と呼ばれる聖なる酒)を捧げる場面で、メンはマヤ語で祈る。水、土地、雨のためのメンの祈りの意味を、マニの人々はマヤ語で理解する。それらの祈りはマヤ語でなくてはならない。マヤ語での祈りがマヤの神々に届くのである。このマヤ語の祈りの中に中心と四方に関係する表現が頻出する。供物が捧げられる対象は、東と空の4隅にいる。偉大な東にいる1〔人〕の *ch'ac*、4〔人〕の偉大な *ch'ac* たち、あるいは空の4隅にいる4〔人〕の *balam* たちである。

考古学・歴史的史資料が指摘する四方の思考が何千年という巨大な時間の中で明確に残存している。マヤ語のように現代国際社会では使用されない古語を生き生きと活用するのが宗教である。それらの言語によって祈り、それらの言語で何千年も語り伝えられてきている意味を21世紀の現在に再現し、その再現された意味を生きようとする。宗教は古語を通じて巨大な時間のなかで生きていけると言えよう。

そして、マニの人々はマヤの儀礼慣習を通じてこの四方の思考を事実ととらえる。儀礼場面における「東の空に入口のようなものがある」、「雲の4隅」、「空の4隅にいる」などのマヤ語表現は、マニの人々にとっては事実なのである。マヤ伝来の仕方での祈りと供物が捧げられているかぎり、神々は人々を悪い風で罰して病気にしないし、畑や家畜などに害を及ぼすことはない。このことは、マヤの太古の神話的な時間が現実化されている一場面と言えよう。マニの人々は太古からの神話的時間を現在化(representation)させるのである。この宗教行為は毎年繰り返されていく。その一具体的事例は雨乞いの儀礼 *ch'a ch'ac* である。

2) *sak'ap*

祈りとともに宗教行動の基本である儀礼行為にも中心と四方（五方）は現存している。マヤの一伝統儀礼である *sak'ap* は、中心と四方（五方）を明確に表現する。宗教意識が宗教行動によって表出する一場面である。マニの人々はここで太古のマヤを再現する。

sak'ap は四方と中心に置かれた5個のヒカラに供物 (*sak'ap*) を入れて祈り、その後、供物 (*sak'ap*) をシップチェ (*shibche'*) の葉で少量すくって四方にまく行為である。祈りも供物も、それらに関係する事物も全て伝統的マヤである。日常生活で使われるスペイン語の分からない人々も *sak'ap* はマヤ語で分かる。

マニのミルパでは、トウモロコシを植えつけるべき場所に行き、その土地の四方に棒を立てる。それらの棒を目安に、狭い道巾ほどに雑草を刈る。雑草を刈り始める前に *sak'ap* をする。シップチェ (*shibche'*) の葉で *sak'ap* をすくって、東 (*lakin*)、北 (*shaman*)、西 (*chikin*)、南 (*nojol*) の順にふりまく。焼畑後にも、トウモロコシの収穫祭でも、これと同じ仕方で *sak'ap* を行う。ミルパで働いたことのない女性も *sak'ap* を知っている。それをどのように行うかを知っている。*sak'ap* がマニの人々の現実の暮らしに根づいているからである。

sak'ap はメンの行う「水のための儀礼 (*hua'ji chee'm*)」、「土地のための儀礼 (*jetz'lu'um*)」、「ミルパのための儀礼 (*hua'ji kol*)」、「雨乞いの儀礼 (*ch'ach'ac*)」における中心的な宗教行動である。*sak'ap* はマニの現実の生活のさまざまな面において頻繁に繰り返される。メンとマニの人々が太古のマヤを継承している一場面である。マニの人々はマヤの伝統によって、つまり太古の言語と行為によって、病気や社会的不安から立ち直っていく。太古の言語と祈りで成り立つ古いマヤの伝統はマニの人々にとって現実なのである。宗教事象における太古性・残存性の一具体的事例であると言えよう。そしてかれらはこのマヤの伝統を生きるとともに、16世紀から受容しているカトリックをも生きている。

3) *yumtz'ilob*

メンの祈りと *sak'ap* に類出する中心・四方（五方）思考は、マヤ神ユンチロ (*yumtz'ilob*) に緊密に関係する。メンの宗教行動である儀礼が太古マヤの宗教意識を目に見える形にして外に表わすのである。宗教は現実にはさまざまな儀礼を伴って存続・変容しているが、それらの儀礼の一つひとつが意味を持っている。それぞれの意味は儀礼に使われる象徴とそれらの象徴に関係する行為によって伝達される。

yumtz'ilob は自然の要素（森、山野、藪、雨、水、風など）、動物（鹿、蜂、馬、犬など）、村、洞穴、井戸などの空間と深く結びついた存在である。*yumtz'ilob* は東の空にいて、天・空・雲の4隅を守る。マニの口頭伝承ではこのように考えられている。マニの人々がトウモロコシで作った食物である *sak'ap* や *balche'* を *yumtz'ilob* に捧げると、*yumtz'ilob* は降りてきて供物を受け取ると信じられている。供物は生ものではなく、全て伝統的マヤの仕方で煮たり、炊いたりした

ものである。マヤの仕方では、供物と祈りが捧げられているかぎり、*yumtz'ilob* は人々を悪い風で罰して病気にしない。また、マニの人々の畑や家畜などに害を及ぼすこともない。

バカップ (*bacab* 空の運搬人・風の神) とチャック (*ch'ac* 雨の神) を含むマヤの神々は、中心・四方(五方)、洞窟、井戸、自然などのマヤの空間に存在する。また、そのようなマヤ的な空間に古来存続してきた動植物に宿ると考えられている。これらのマヤの神々はマニの人々の空間感覚の基本的部分を形作っている。と同時に、マニの人々の時間感覚の基本的部分を形作っている。マニの人々はこれらの宗教意識を持ちつつカトリシズムを信仰しているのである。宗教の太古性・残存性と深く関わる事実である。マニでは神話的時間を現実としてとらえている。メンによる古代マヤの儀礼慣習の意味を理解し、儀礼に参加する。マニの人々は儀礼慣習と深く結びついている古い口頭伝承の意味を理解し、その中味を現実にする。この仕方では、メンの祈りと宗教行動を共有し分有しているのである。

宗教行動である儀礼の役割ははかり知れないほど大きい。意味のないことを何度もくりかえし行うのが儀礼ではない。もしそうであれば何千年もの間人びとを突き動かさずにつづけることはできないであろう。逆に儀礼は人間がそれを行わなければそもそも考えることができないことを考えることができるようにする。人間がそれなしには生きていくことができない意味を伝えるために、儀礼はさまざまな象徴を用い、それらに親密に関係する行為を行うのである。宗教がきわめて古いものごとを長大な期間にわたり持続させてきているのは、儀礼をこのようにとらえその深大な意義を再確認しつつ現実に儀礼を行いつづけるからである。

マニの宗教的文化統合は複雑であり、この複雑な宗教的文化統合が太古のものごとを残存させながら存続変容してきている。この事実を踏まえてマニのカトリシズムは理解されなければならない。

3 カトリシズム (Catholicism)

1) 教会

マニの人々は教会を「神の家 (*la casa de Dios*)」と呼ぶ。教会の内陣・身廊・側廊(袖廊)はイエスの身体を象徴的に表しているとする解釈もある。内陣を頭部、身廊を身体、側廊(袖廊)を腕と見なすのである。しかし、この解釈はマニにはない。パンと葡萄酒をそれぞれイエスの身体と血と解釈するだけである。

マニの人々はここで祈る。そしてミサに参加する。ミサはパンと葡萄酒という食事による象徴を通じて、イエス・キリストの死と復活を記念 (*anamnēsis*) する宗教行動である。何千年も昔のイエス・キリストによる救いをくり返しくり返し現在に再現 (*representation*) することである。カトリシズムでは唯一・絶対・人格神が世界のすべてを創造したと考える。この世はその神の命令に背いた人間が罪を負って生きていくところである。この世にあっては罪を自覚し神のことばによって生きていかなければならない。このことを絶えず示す象徴が「神の家」にある十字架で

あり聖像である。そして教え示されていることを常に現在において再現しくり返しくり返し記憶するのがミサである。

宗教は現実にはさまざまな儀礼を伴って存続・変容しているが、それらの儀礼の一つひとつが意味を持っている。それぞれの意味は儀礼に使われる象徴とそれらの象徴に関係する行為によって伝達される。教会と十字架はそれぞれマヤ・カトリック社会になくってはならない重要な象徴として、マヤ・カトリシズムの宗教を信じる人たちに何千年にもわたって生きる意味を与えつづけてきている。

このマニの教会は聖像や絵画で溢れている。文字を読めない人あるいは書物を買うことができない人にも、具体的で分かりやすく教義やメッセージを伝えるための工夫である。カトリック教会はいわゆる美術装飾によって宗教教育を行う空間でもある。キリスト像、磔刑像、聖母、聖徒、洗礼盤などに関する絵画および彫像が側廊に陳列してある。それらの具体像は入口（西）から身廊を経て内陣に至る過程に陳列され、いわゆる『聖書』の役割を果たしているのである。ヴィクトル・ユーゴーの「大聖堂は書物である」の言にふさわしい開かれた空間である。

2) コンパドラスゴ (Compadrazgo)

コンパドラスゴはカトリシズムの理念に基づく社会関係ネットワークである。この擬制的親子関係は宗教の太古性・残存性という性質を色濃くそなえもっている。太古の宗教的理念が人々の現実の生活の有り様を社会全体にわたって強く方向づけている一具体的場面である。

コンパドラスゴは洗礼、聖体拝領、堅信、15歳の祝い、婚礼の場面で、これらの儀礼を受ける本人が実の両親とは違う人と親子の関係を結ぶ仕組である。この仕組によって、まず本人と擬制の両親との間に親子の関係（パドリナスゴ・マドリナスゴ）が成り立つ。この関係が成立した時、三者はそれぞれアイハード（代子）、パドリーノ（代父）、マドリーナ（代母）と呼ばれる。と同時に本人の両親と擬制の両親との間に親同士の関係（コンパドラスゴ）が成り立つ。一人が通過儀礼場面だけでも10とおりの制度化された社会関係を結ぶ。その場面では本人の両親も同じく社会関係を結ぶ。本人と本人の両親とが築く20とおりの社会関係は一生つづく。

この多面的な関係は単に形式的なものではない。逆に、その後一生の間、関係する者たちの間に尊敬と社会経済的および道徳的な支援を義務とする関係を担わせる。したがって、この関係はマニの人々の現実の生活の中で重要な意味と機能を持っているのである。

コンパドラスゴは血のつながった現実の親子関係を超越するより開かれた社会関係である。また、この親子関係はこの世の親子関係を超越するあの世での親子関係である点でさらに開かれた関係である。この大規模で多面的・重層的な社会関係ネットワークがマニの村全体の現実生活を動かしている。この社会関係ネットワークは個と家族・親族を越えて広く深く築き合う社会関係といえる。この社会関係は有無を言わず個をより広い人間関係の中に引きずり込む。

コンパドラスゴはカトリシズムの宗教的理念が現実にも共同体全体にわたって機能している具体

の一場面である。そしてパドリナスゴ・マドリナスゴ・コンパドラスゴの歴史はきわめて古い。これらの仕組の関連史料は5世紀に遡る。非常に古い宗教的仕組が現在まで存続し人々の現実の生き方を方向づけている一事例でもある。この事実は宗教の太古性・残存性の問題に深く関わる。

4 マヤ・カトリシズム複合体 (Maya-Catholicism Complex)

マニはマヤ語とマヤの伝統を基盤とする。その基盤の上に16世紀以降カトリシズムを受容してきた。低地マヤに位置するマニの人々は、現在、マヤ語とスペイン語を使って日々の生活をおくっている。マニには言語を基盤としてマヤが生きているのである。マヤ語で語り、マヤ語で理解し、マヤ語で共有している自然、社会、文化がある。マヤ語を使い、マヤ伝来の儀礼を行わなければ通用しない宗教(宗教意識と宗教行為)が現存するのである。

教会でのミサ、教会の外で行われるカトリックの儀礼、例えばクリスマス直前の9日間に行われるポサーダ(posada ヨセフとマリアが宿を探し求めて歩いたことを偲んで、それを実際に再現する行為)、子どもたちへのカテキスモ(catequismo キリスト教の教えを簡明な問答形式で書いた入門書)もマヤ語とスペイン語の両方を使って行われる。

マニの人々は、古い母語マヤ語の岩盤の上で、スペイン語を用いるカトリシズムを受け入れ保持してきたと言えよう。時間感覚とともにマニの人々の思考と行動の基本的枠組を構成している空間感覚は、マヤ的伝統とカトリシズムの複合として存在している。中心と四方(五方)、共有地、神話的空間にはマヤ的な太古の伝統が残存している。マニの人々はメン(呪医・祭司)とマヤ語を媒介してこの太古の空間感覚を理解し、それを何千年もの巨大な時間の中で共有し分有しているのである。

1) マヤ・カトリシズムの中心 (*k'iwic* and centro)

マヤの中心をマヤ語で*k'iwic*と呼ぶ。マニで「セントロはマヤ語で何と言うか。」と人々に訊ねれば、*k'iwic*とマヤ語が返ってくる。マヤの中心*k'iwic*は洞窟(*actun*)とセイバの樹(*yaxche*)を重要な構成要素として含む。現在もその形態は変わらない。洞窟とセイバの樹をめぐる口頭伝承は、*k'iwic*が舞台である。

マニの*k'iwic*のセイバの樹は巨木である。セイバは聖なる木(*el árbol sagrado*)とも言われている。その根は地下へ、幹は地上へ、樹は天に届くと考えられている。地下界・地上界・天上界の三層を象徴している樹なのである。同じく村の中心(セントロ)に聳える修道院・教会に対峙するかのよう生茂り、一目瞭然である。3m~5mを越える幹は持て余すかのようにその根の一部を地表に露わにし、ごつごつ盛り上がったその根の上でマニの人々は憩う。

他方、マニの人々が「神の家(*la casa de dios*)」と呼ぶカトリック教会は村落の中心に高く大きく聳え立ち他を圧倒している。水平にではなく天に向かって縦に延びている。この教会を中心に東西南北に小教区(6教区)、その小教区を中心に居住区域(*barrio* バリオ)、居住区域の周

圃に耕地、耕地の周囲にさらに山野が展開する。その形状は教会を起点に放射状であり、道路は碁盤の目状に走っている。村落の中心に聳え立つ教会には広場、公園、役場、学校、交通手段の駐停車場が付設する。この教会およびその付設公共施設の建築空間はカトリック社会ではほぼ同じ様式で、高さと光をモチーフとしつつ放射状、碁盤の目状、左右対称を特徴として開かれている。

マニの中心はこのように何千年もの時間の中で持続してきているマヤとカトリックの複合として存在しているのである。



写真3 マニの中心に屹立する修道会・教会



写真4 マニの中心に聳立するセイバの木

マニでは、8月15日から6日間、毎年フィエスタが行われる。この場面では闘牛 (la corrida de toros) が不可欠である。マニの人々は闘牛を非常に好む。フィエスタの期間、闘牛場は連日超満員である。闘牛をする神父もいる。老若男女闘牛を好む。普段の食事時や休憩時などに闘牛を話題にすると話は尽きない。ほとんどの人が闘牛を楽しみ闘牛を知っているからである。見物人の中には場内に降りて闘牛の真似をする者も少なくない。それを観て大きな歓声が起こる。

闘牛場は教会の広場に円形に築かれる。マニの人たちが自身でこれを築く。この円形闘牛場の真ん中には必ずセイバの木を立てる。セイバの木を立てなければ闘牛は始まらない。これを行うのはフィエスタの主催者の一人と決まっている。本人は、山からセイバの木を切り出してきた、闘牛場の真ん中に立てる。この仕方ではセイバの木を立てなければならないのである。

マヤの伝統が付着しているセイバの木は、中心・四方 (五方) というマヤの思考が古くから結びついているのである。

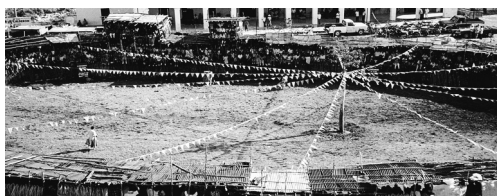


写真5 闘牛場の中心に立てられたセイバの木



写真6 闘牛場の傍で牛を殺して即売

マニでは闘牛を行う時は必ず牛を殺す。1日に1頭ずつ、計6頭殺す。殺す場所は闘牛場のすぐ側である。その場で肉を売る。闘牛が行われているその側で牛の血が大量に流れ出る。男たちがその牛から直接肉を切り取り、その場で売り続ける。一方より見れば、祝祭における生贄と言える。主題は血である。セイバと洞窟を中心シンボルとする祝祭と生贄である。

セイバは聖なる木 (el árbol sagrado) とも言われている。その根は地下へ、幹は地上へ、樹は天に届くと考えられている。地下界・地上界・天上界の三層を象徴している樹なのである。

16世紀中葉、教会が存立する側の洞窟の祭壇でマヤの伝統宗教儀礼が行われていた。ここでの主題は生贄であった。マニの人々の生贄の理解は古く深いのである。

このようにマヤの伝統とカトリシズムが複合するマニの中心に教会は建ってマニの人々の信仰を保持しているのである。

2) マヤ十字形 (cruz verde)

宗教は現実にはさまざまな儀礼を伴って存続・変容しているが、それらの儀礼の一つひとつが意味を持っている。それぞれの意味は儀礼に使われる象徴とそれらの象徴に関係する行為によって伝達される。教会と十字架はそれぞれマヤ・カトリック社会になくはならない重要な象徴として、マヤ・カトリシズムの宗教を信じる人たちに何千年にもわたって生きる意味を与えつづけてきている。

マニの教会の身廊 (nave) の西側入口の円柱の台座に 145.2cm の高さの石の十字架 (la cruz de piedra) がある。この十字架の上には救世主 (el Salvador) の姿をし、磔刑を受けつつ右手で祝福を与えている人物彫像が刻まれている。この人物彫像は明白にイエス・キリストに倣ったものであるが、マニではこの人物が一人のマヤ人であることを疑う人はいない。この十字架が安置されていた場所を確定する証拠はない。中庭、修道院・教会の小尖塔、インディオ礼拝堂のどこかに置かれていたのであろう。人物彫像がマヤ人であること、これが問題である。



写真7 マニの教会に現存する石の十字架



写真8 マニに現存するマヤの十字架

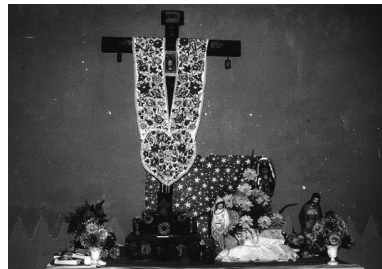


写真9 マニに現存する十字架

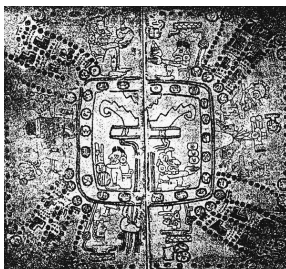


写真10 マヤの遺跡の十字形

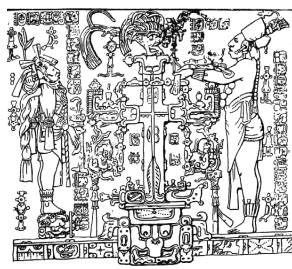


写真11 マヤの遺跡の十字形



写真12 マヤの遺跡の十字形

厳密に言うと、この十字架はマヤの伝統的な十字形 (*cruz verde*) ではない。マヤの十字形はギリシア十字形である。2本の交差は上下左右に均等に均衡を保っている。そしてこの十字形に伝統的マヤの空間感覚が反映されている。中心と四方およびそれらに伴う色彩である。東西南北にそれぞれ赤黒黄白が配置され、中心は緑である。この思考は古代マヤの宇宙観の根幹であると同時に、マヤ暦の儀礼 (ワウエブ *uayeb*) の根幹でもあった。

この十字形は古い。写真 10・11・12 にあるようにマヤの遺跡にその形を留めている。マヤの人々にとってカトリシズムの十字架は連想しやすいシンボルであったと考えられる。マヤのギリシア十字形はその後カトリシズムの十字架形に変容していく。その変容の過程を厳密に追跡することは現時点ではできていない。

今日マニで使われている木製の十字架は *cruz verde* と呼ばれている。この十字架は *ya-xche* という木から作る。*ya-x* の語義は、一つ、と緑である。*che* は木が語義である。この十字架が「緑(木)の十字架」と呼ばれる由縁である。

このマヤの十字架にはイエス・キリストの磔刑に関する事項が小さな絵画として描かれている。INRI、聖杯、金槌、階段、イエスの顔、階段、釘抜き、鶏、サイコロが図1のように配置されている。イエスの顔は十字形によっては磔刑のイエスの姿で描かれる。また、イエスの顔の部分には白布が置かれる場合もある。また、釘が描かれる場合もある。

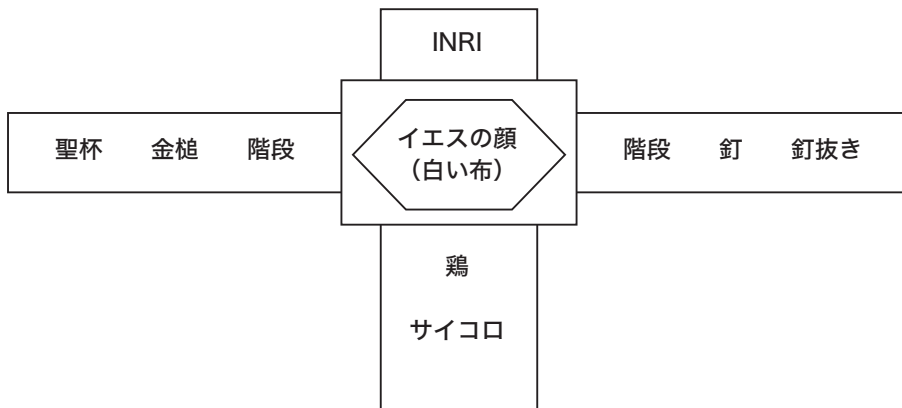
マヤの十字形に描かれている事項はイエス・キリストの受難 (*la Pasión de Jesucristo*) に関連する。受難の象徴と言ってよい。

INRI は「ユダヤ人の王ナザレのイエス」(*Iesus Nazarenus Rex Iudaeorum Jesús Nazareno Rey de los Judíos*) を意味する。イエスが十字架に磔けにされた時、それを擲擧するために貼られた罪標である。聖杯 (*la copa sagrada*) はイエス十字架降架の際に脇腹から流れた血を受けた容器であり、また聖杯は最後の晩餐で用いられた食器でもある。金槌、釘、釘抜きは磔刑に不可欠である。梯子階段 (*la escalera*) は天地結合、昇天、十字架昇架・降架の象徴である(「創世記」28 他)。イエスの顔の近くに置く白布は、ヴェロニカ (ウェロニカ *Veronica*) のハンカチである(「ニコデモ *Nicodemus* 福音書」)。鶏はペテロへのイエスのことばに関する(「マルコによる福音書」14:66-72 他)。サイコロ (*los dados*) は磔刑の場面での籤引きに関連する(「ヨハネによる福音書」19:24 他)。

マニの人々は十字架を使ってカトリシズムの教えを説く場面でこれらの象徴が使われたと言う。

イエスの受難を中心にカトリシズムが伝道普及されていく過程では、マヤの十字架にカトリシズムの重要事項が刻まれ宗教教育に活用されていたのである。上述のマヤ人の磔刑がこのような事実とどのように関連するか不明であるが、今日でも教会の身廊の中に保管されているのは事実である。

図1 マヤ十字架の略図



I 個人の断面における時間感覚の分析

1 時間感覚分析のためのモデル (Analytical models)

時間感覚は矛盾、不合理に満ちている複合体である。その複合体を具体的かつ厳密に分析するにはどのような方法が有効か。その一つの方法は、分析モデルを作ることである。分析モデルを仮説とし、現実の複雑な様態を分析モデルの構成要素に照応・対比させて論究していく。

ここでは最初に分析モデルを作る。次に、その分析モデルにもとづいて、作業仮説を作る。

1) 自己把握 (Self-recognition)

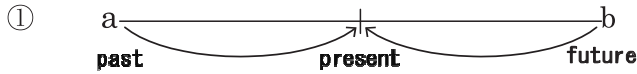
アウグスティヌス、木村 敏、本居宣長、マックス・ウェーバーの考えを踏まえてのモデルである³⁾。過去、現在、未来という視点のどこに重点を置いて自己をとらえるのかを主題とする。

(1) 過去に重点を置く場合、伝統・出来事・歴史的事実に準拠して、現在の自己を意味づける。



a と b は無限の時間に開いている場合と限定された時間に閉じている場合がある。

(2) 現在に重点を置く場合、①時間は過去にも未来にも延びない、②過去にも未来にも延びる、が考えられる。①は、現在に限定した狭い時間幅における自己の意味づけ、である。②は、両方に延びる広い時間幅における自己の意味づけ、である。

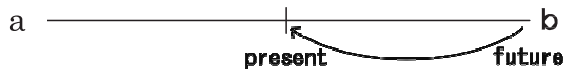


a と b は無限の時間に開いている場合と限定された時間に閉じている場合がある。



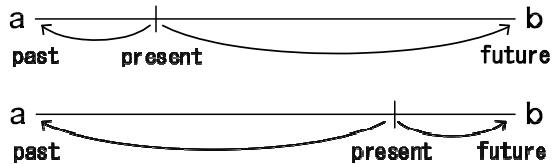
a と b は無限の時間に開いている場合と限定された時間に閉じている場合がある。

(3) 未来に重点を置く場合、未来に起こるであろうものごとから自己を意味づける。時間は少ない。現在の自己の意味づけが、常に緊張をはらんだ形で行われる。



a と b は無限の時間に開いている場合と限定された時間に閉じている場合がある。

(4) これらの (1) (2) (3) を総合して、次のモデルを作る。時間は過去にも未来にも延びている。しかし、過去により永く延びている。宗教の太古性・残存性にもとづく。



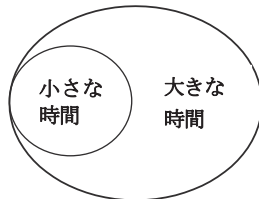
a と b は無限の時間に開いている場合と限定された時間に閉じている場合がある。

2) 神話的時間の現実化 (representation of mythological facts)

デュルケム、レヴィ=ストロース、リーチ、本居宣長の考えを踏まえてのモデルである⁴⁾。太古の神話的事実が、今現在の現実の理解の手本になる。神話の中での英雄による怪物退治・難事解決の語り聞かせが、例えば、難産の克服に作用する。神話の内容は社会的不平等の矛盾・不合理性をも説明する。王と臣民の関係が、親と子の関係および上司と部下の関係に相対化・合理化されることもある。

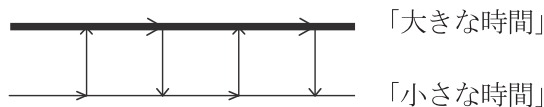
ここでは神話的時間を「大きな時間 (Major Time・Mythical Time)」、この世の時間を「小

「小さな時間 (Minor Time・Worldly Time)」と表現する。この「大きな時間」が「小さな時間」を意味づける。「大きな時間」の中の事実が、「小さな時間」の中の事実を変える。



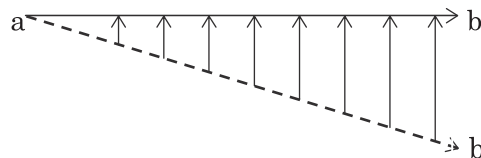
3) 「小さな時間」における「大きな時間」の再現・活性化 (representation and revitalization of Major Time in Minor Time)

「大きな時間」は「小さな時間」の中で繰り返され、活性化される。その具体的事例は儀礼である。祖先祭、雨乞いの儀礼、成人儀礼などの儀礼は各社会・文化の太古の要素を再現し、活性化させ、集団の構成員に記憶させていく。「小さな時間」の中で分散している集団構成員を、「大きな時間」で行われる儀礼場面に集合させ、統合する。



4) 理念性・非合理性を特徴とする時間把握 (coherent cognitive consistency of time perception)

上述の三つの時間分析モデルを宗教事象の分析に適用する場面では、理念性・非合理性を特徴とする時間把握を仮説とする。つまり、自己把握、神話的事実の現実化、「小さな時間」における「大きな時間」の再現・活性化は、或る宗教的理念を軸にしてなされると考えて分析する。



a と b は無限の時間に開いている場合と限定された時間に閉じている場合がある。

2 作業仮説 (working hypotheses)

3つの分析モデルにもとづいて具体的な作業仮説を立てる。一定の操作によって設定された宗教度の強い人(後述)ほど、次のように時間をとらえるであろう。

1) 過去と未来の時間を取り込んで自己をとらえる。過去と未来を取り込むという意味で時間

幅は広い。

- (1) この世の始まり、この世の終わりを含めた時間把握をする。
 - (2) 神や聖なる存在の誕生と死が自己把握に結び付けられる。
 - (3) この世の終わりの自覚が自己把握および統一的倫理的態度に結びつけられる。
- 2) 神話的事実を現実と考える。
- (1) 神の創造、終末、蘇りなどを含めて時間が語られる。
 - (2) 神話に登場する人物が現実の血縁的先祖としてとらえられる。
- 3) 「大きな時間」と「小さな時間」とで事象をとらえる。
- (1) 祝祭や行事の意味を理解し、それらに積極的に参加する。
 - ①ミサ（イエスのことの現在における繰り返しであるミサ）
 - ②12月（イエスのことの現在における繰り返しであるナヴィダード）
 - ③日曜（神の創造およびイエスの復活にまつわる安息日の繰り返しである日曜日）
 - ④ヴィルヘンの月（ヴィルヘンのことの現在における繰り返しであるフィエスタ）
 - ⑤死者の日（死者のことの現在における繰り返しである死者の日）
 - (2) シンボルの意味を理解し、現実に関わりつけて意味づける。
 - ①十字架
 - ②聖像
 - ③パンと葡萄酒
 - ④水
 - (3) 「小さな時間」よりも「大きな時間」の方により重要な価値づけをする。
 - ①祭への価値づけの高さ
 - ②洗礼（バプティスモ）への参加
 - ③ミサへの価値づけの高さ
 - ④夜明けを神への感謝とする
 - ⑤「小さな時間」における希望を語る。

自己把握、神話的事実の現実化、「大きな時間」と「小さな時間」による把握は、宗教的な理念を踏まえて行われる。

3 時間感覚分析の具体的調査方法

1) 有意味図版質問紙

第1の調査は個人面談による聴取調査である。質問はⅠ 宗教度 Ⅱ 「小さな時間」に関する質問 つまり、日常の時間をどのようにとらえているかについての質問 Ⅲ 「大きな時間」に関する質問、つまり神や神聖な存在の誕生や死、世界の始まりや世界の終りなどをどのようにと

らえているかについての質問、IV 太古の出来事あるいは神話的な事実に関する質問、ここではヴィルヘン・マリアと幼子イエスの写真、イエスの磔刑の写真を自分との関係でどのようにとらえるかについての質問、で構成されている。

2) 有意味図版物語作成

第2の調査は個人面談による聴取調査である。ここでは有意味写真8枚を使ってそれぞれに対し自由に短い物語を作ってもらう方法をとっている。それぞれの物語について、(1)時間の幅は長いか短いか、(2)「大きな時間」と「小さな時間」がどのように用いられているか、(3)理念による現実の組み立て直しが具体的にどのように表れているか、を分析する。

これらの調査結果は個別具体的な内容を提示しながら検討しなければならない。そのための紙数がこの小論では与えられていないので別稿を期したい。

聴取調査用資料

名前() 性別 男性/女性 年齢() 職業()

I 次の質問に①強くそう思う、②そう思う、③どちらとも言えない、④そう思わない、⑤強くそうは思わない、で答えてください。

- 1 神は目に見えるものも目に見えないものもすべて創造した。
- 2 毎週毎日神に祈ります。
- 3 この世の終わりは来ます。神は生きている者にも死んでいる者にも最後の審判をくださいます。
- 4 あの世の生活はあります。
- 5 わたしは罪を負っています。
- 6 地獄はあります。
- 7 悪魔はいます。

II 次の質問に答えてください。

- 1 一日のうちで何時があなたにとって最も大切ですか。(複数回答可)
- 2 一週間のうちで何曜日があなたにとって最も大切ですか。(複数回答可)
- 3 一年のうちで何月があなたにとって最も大切ですか。(複数回答可)

III 最初に、次の事項をあなたにとって大切な順番に並べてください。次に、なぜそのような順番に並べたかの理由を述べてください。

- この世の始まり、この世の終わり、イエス・キリストの誕生、
イエス・キリストの死、わたしの誕生、わたしの死

IV 次の写真を見て思いつくことをできるだけ多くすべて述べてください。

1 ヴィルヘン・マリアと幼子イエス

2 イエス・キリストの磔刑



II 調査結果（個別聴取調査の事例）

本稿では各質問項目に対する回答の全体像をとらえる。個々の具体的な回答例は別稿で提示し、それらの内容を個人の断面で分析するが、その場面での分析がより厳密になるためには全体像の把握が欠かせないと考えるからである。なお、各項目に関連する「 」内の内容は回答例の一部を表す。

II-1 時刻 (time)

夜明け（午前6時）、夕暮れ（午後7時）が選ばれる。その理由として涼しさ、仕事を終えての安堵感もあげられる。

夜明けと夕暮れを選ぶ場合、その意味づけが神に関係する事例がある。

1) 夜明け

「夜が明けたとき、さらに一日を恵んでくださった (por un día más) ことに対して、神に感謝して祈ります (darle gracias a dios)。」

「神の恩寵による時です (por la gracia de dios)。新しい一日です (es un nuevo día)。そして新しい一日を迎えることができるので大いに満足するからです。」

「神のおかげでもう一日が与えられたからです (nos da un día más gracias a dios)。」

2) 夕暮れ

「日が暮れるとき、さらに一日を終えた (por haber concluido) ことに対して、またさらに一日をわたしたちに与えてくださった (regalarnos un día más) ことに対して、神に感謝して祈ります (darle gracias a dios)。」

「夜が『聖書』を読む時間 (el horario para que yo leer mi biblia)、ミサに行く時間 (en por las noches voy a misa)。」

「神のおかげでまたもう一日を生き続けたからです (gracias a dios seguimos vivos después de un día más)。」

II - 2 日 (day)

1) 日曜日

ほぼすべての人が日曜日を選ぶ。その理由はミサ、安息を中心に宗教的である。土曜日を選ぶ場合も宗教に関係している。

(1) ミサ

「神に捧げられている (se dedica a dios) からです。しかし、時々、わたしたちは日曜日を神に捧げる (para regalarle a dios) という義務を果たしておりません (no cumplimos)。神のことばを聴く (escuchar la palabra de dios) ことはすばらしいことです。心が満足する気持ちになります (se siente a uno contento)。」

「ミサがありたくさんの人たちが来ますし、みんな安息するからです (hay misa y mucha gente se van y todos descansan)。ミサでは神のことばを聴いてすばらしい気持ちになります (se siente bonito al escuchar la palabra de dios)。」

「日曜日は時々ミサに行きます。ミサに出席しているとわたしは気持ちがよくなります (me siento bien estando en misa)。神とともにあって幸せを感じます (me siento feliz con dios)。わたしは信仰が篤いからです。」

(2) 安息 (Sabbath)

「神は6日働かれて、日曜日には安息されたからです (los seis días para trabajar y el domingo para descansar)。」

「なぜなら安息日ですから。日曜日には必ずミサに行くとはいかぎりませんが、ほとんどの日曜日にはミサに行きます (no todos los domingos voy a misa, pero casi siempre)。神を信じることによって、また、幸福でおることが出来ますようにと神にお願いすることによって、わたしは気持ちが安らぎます (me siento muy bien por la fe o para pedirle por el

bienestar)。」

「一週間のうちで日曜日は安息するためにあるからです (el domingo es para descansar)。日曜日は家で過ごしますし、もう一週間を始めるために普通はミサに行きます (para empezar una semana más por lo general me voy a misa)。」

2) 土曜日

「土曜日です。なぜなら、教会で教理問答 (doctrina en la iglesia) があるからです。神のことばをわかるようになるために(para que aprendan la palabra de dios)それに出来ます。」

II - 3 月 (month)

1) 12月

ほぼすべての人が12月を選ぶ。理由はクリスマスである。次に、11月、8月が多いが、それぞれ死者の日、ヴィルヘン・マリアに関係する理由である。

「クリスマスのためにたくさんのフィエスタをするからです (se hace muchas fiestas por la navidad)。ポサーダは毎年行う伝統です (una tradición que cada año se realiza)。

幼子イエス(niño dios)のお祝いをします。12月25日に、今生まれたばかりの幼子イエスのフィエスタをします。そうすることでこの日を尊ぶ (lo veranamos ese día) のです。

カトリコは死者を信じています (los católicos sí creemos en los difuntos)。わたしたちの子どもたちにどのようにしてわたしたちの死者のための慣習を行うのか (cómo es la costumbre que le realiza a nuestros difuntos) を教えます。」

「12月です。イエスの誕生 (nacimiento de Jesús) がありますから。わたしたちにとっては大いなる喜び (nos dan mucha alegría) です。たくさんのフィエスタでお祝いをします (se celebra mucho con fiestas)。一年に一度のことですから (sólo una vez al año)。」

「12月です。なぜなら、クリスマスでポサーダがあるからです(es navidad hay posadas)。また、ヴィルヘン・マリアとサン・ホセを12月16日から24日まで家から家へと持ち運んでいくからです (se lleva de casa en casa)。」

「イエスが生まれた月でフィエスタがあるからです。」

「12月です。幼子イエスの誕生を祝う月 (la celebración del niño dios) だからです。子どもたちと一緒に朝のミサに出席します。わたしは神父がキリストの教えの説明をするのが好きです (me gusta la explicación del evangelio cuando lo explica el padre)。

幼子イエスの世話をしながら、神に感謝します (cuidando Niño Jesús, darle gracias a dios)。幼子イエスのフィエスタのある月ですから争いごとなどが起こらないように注意しま

す (y cuidarlo de no pelear en ese mes por su fiesta del Niño Dios)。ですから、どんなときも争いごとは起してはなりません。今は祭壇がありませんが、12月に祭壇をこしらえて幼子イエスをそこに置きます。そして祈ります。

ヴィルヘン・デ・グアダルーペです。ヴィルヘン・デ・グアダルーペはしばしば奇跡を起します (muy milagrosa)。ですから、わたしはヴィルヘンを信じています。わたしがヴィルヘンにお願いしたことをわたしに与えてくださいます (lo que le pido me lo concede)。ヴィルヘンにわたしの子どもたちの健康をお願いします。誕生日のときは、わたしの子どもたちがヴィルヘンのためにフィエスタをして祈ります。イエスよりはヴィルヘンに対してより多く祈ります。なぜならばいつもわたしを援けてくださるからです。」

「12月です。なぜなら、神を祝うために毎日ポサーダがあるからです (hay posadas a diario por la celebración de dios)。1月もまた重要です。なぜならば、わたしの子どもたちの誕生月ですから、わたしたちはフィエスタを続けますので。」

2) 11月 【死者の日】

「11月です。なぜなら、死者の月 (el mes de los finados) だからです。祈りを捧げて、タマル (tamal)、ピープ (pib)、チョコレート、パン、ナンセ (nance) やサツマイモ (camote) やユッカ (yuca) のお菓子など、マヤの食べ物 (comidas mayas) を作ります。第一日目は死んだ子どもたち difuntos niños の日です。第二日目は死んだ大人たち difuntos adultos の日です。死んだ者つまり janal pixan はカトリックが持ってきたものではありません (no es algo que trajo la religión católica)。はるか以前からあったものです (había desde mucho antes)。」

3) 8月 【ビルヘン】

「8月です。ヴィルヘン・デ・アスンシオンを祝う月 (la celebración de la virgen de la Asunción) だからです。」

III 6枚カード

1) 世界の始まり

世界の始まりはほぼすべての人によって神の創造ととらえられている。

「父なる神が世界の初めを創造しました。大地、人間、動物、世界にあるすべてのものを創造しました。アダムとイヴが罪人の最初です (Adán y Eva cometieron el pecado)。わたしたちは罪を償っているのです (lo que nosotros estamos pagando)。」

「そこから、何も無いところからすべてが生まれてきました (de ahí surgió todo de la nada)。神が世界を創造されました (dios creó el mundo)。ということは神が全能であるということを示します (el todo poderoso)。」

2) イエスの誕生

イエスの誕生は、自分たちへ命を与えるため、わたしたちを救うため、と意味づけられている。イエス・キリストを救い主とする考えと同時に、イエスのおかげで命が与えられたととらえられている。

「なぜなら、わたしたちはカトリコで、イエスはわたしたちに命を与えてくださった方ですから (Jesús es el que nos da la vida)。イエスはわたしたちの一日を護ってくださいます (Jesús nos cuida de día)。夜は神が守護者です (dios es nuestro defensor)。」

「イエス・キリストが生まれ、父なる神が愛する子イエス・キリストをわたしたちの救いのために遣わされました。イエス・キリストは生まれた後、世界の救い主であるという理由で迫害されました (él desde su nacimiento fue perseguido por ser salvador del mundo)。……イエス・キリストがいらっしゃるのおかげでわたしたちはあり続ける (gracias a él nosotros seguiremos) のです。」

「イエスの誕生です。イエスは世界中でとても愛されています (muy querido por el mundo)。」

「イエスがお生まれになりました。なぜなら、神がお生まれになったとき、わたしたちを救うために (para salvarnos) おられました。わたしたちに善く生きることを教えてください (enseñarnos a ser buenos) おられました。神の命令でイエスは来られました (él vino por orden de dios padre)。」

3) イエスの死

イエスの死は自分たちを救うためであるという理解はほぼすべての人たちに定着している。そして、自分の生き方や死がイエスの死との関係で語られる。「イエスの死はわたしの死よりももっと大切である」「わたしはイエスがあたかもわたしの父のように見えます (yo lo veo como si fuera mi papá) 」

イエスの死は魅りとともに語られる。

「神はご自分の死によってわたしたちを救ってくださいました (nos salvó con su muerte)。」

そしてわたしたちのために命を授けてくださいました (él dio la vida por nosotros)。イエスの死はわたしの死よりもっと大切です (su muerte es más importante que mi muerte)。なぜなら、イエスは神ですから。」

「イエス・キリストの死、イエス・キリストはご自分の命をわたしたちのために引き渡されました (él entrego su vida por nosotros)。数多くの虐待をお受けになりました (paso muchos maltratos)。しかし、イエス・キリストの愛がわたしたちの救いのためにわたしたちすべてを支えました (el amor a nosotros soportó todo para nuestra salvación)。」

「なぜならイエスがわたしより先に最初に生まれました。そしてわたしより先に亡くなりました。イエスはご自分が亡くなることによって、わたしたちに永遠の命を授けてくださいました (Jesús con su muerte nos da la vida eterna)。わたしたちはイエスを信じています。」

「イエスはわたしたちのためにその命を授けてくださいました (dio su vida por nosotros)。イエスがどのように犠牲になられたかを見るとわたしたちは悲しみにくれず (nos pone triste al verlo como sufrió)。わたしはイエスがあたかもわたしの父のように見えます (yo lo veo como si fuera mi papá)。ですから、聖金曜日はわたしにはとても重要なのです。なぜなら、イエスがどのように犠牲になられたかを思い出すからです (nos recuerda cómo sufrió mucho)。だれかが亡くなると、わたしはイエスを思い出します (cuando fallecie alguien, me recuerda a Jesús)。ヴィルヘン・マリアとイエスはわたしにはとても重要です。なぜならば何かを請い願うとわたしを援けてくださるからです。」

『聖書』によると、イエスはわたしたちに命を与えるために亡くなった (Jesús murió por dar la vida por nosotros)。そしてその後、蘇られた (después resucito) それゆえに、イエスの戒律に従うように務めなければならない (hay que tratar de seguir sus mandamientos)。」

(1) 【蘇り】

「イエスはわたしたちのために亡くなりました (él murió por nosotros)、そして三日後にわたしたちのもとにもどられるために蘇られました (para volver con nosotros)」

(2) 【永遠】

「わたしにとっては神がお亡くなりになることはありません (para mí dios no morirá)。」

(3) 【愛】

「神は悪い人たちに感謝してお亡くなりになりました (Dios se murió gracias a la gente mala)。ですから、わたしたちは聖週間 (la semana santa) を祝います。なぜなら、わたしたちのために神は亡くなられたのですから (él murió por nosotros)。」

4) わたしの誕生

わたしの誕生は、神の祝福、原罪と結びつけて語られる。と同時に、子どもの誕生がイエスと結びつけられ、イエスの子孫というとらえ方もある。

(1) 【神の祝福】

「わたしたちが小さい頃は何も知りませんでした (cuando somos pequeños no conocemos nada)。大人になって人生のことやイエスのことが分かるようになっていきます (ya vamos conociendo la vida y Jesús)。

わたしの子どもたちが生まれたとき、神の祝福 (una bendición de dios) がありました。今は子どもたちがわたしを助けてくれています。」

「わたしは生まれたことを神に感謝しています (yo nací gracias a dios)。生まれていなかったならば、何もありませんでした。わたしの両親と神に感謝しています (gracias a mis padres gracias a dios)。なぜならば神がおられなかったならば両親もいなかったのですから (gracias a dios porque sin él no se puede nada)。」

「わたしたちが今ここにいるのはイエスがわたしたちに生命を与えてくださったからです (Jesús nos dio la vida)。わたしたちはイエスに対して人々がなしたことを耐え忍ぶことはできません (no podemos aguantar lo que le hicieron a Jesús)。わたしたちはイエスのようにそれを耐え忍ぶことはできません (no aguantamos eso)。そのことをなんとかして成し遂げるためには、イエスに対して人々がなしたことをイエスが耐え忍ぶためにご自分でなされたことをしなければなりません (para lograrlo es hacer cómo hizo él aguantar lo que le hicieron a él)。そのことをわたしたちが実行することはできません (no podemos cumplirlo)。」

「イエスはわたしたちに命を与えるために亡くなった (Jesús murió por dar la vida por nosotros)。」

「イエスは神の子であり、イエスがこの世に生まれ、その後わたしが生まれました。わたしの誕生は神の誕生と比べるとなんでもありません (mi nacimiento no es nada comparado a la de él)。なぜなら、わたしは神の創造のなかのただ一人であるに過ぎません (yo sólo soy uno más de su creación) から。」

「神がわたしたちに与えてくださった命は神からの贈り物です (fue un regalo de dios la vida que nos dio)。」

(2) 【罪を負っている】

「わたしの誕生は神のおかげです (mi nacimiento fue gracias a dios)。今、わたしは家族を持って幸せです。すべては神の恩寵とともにあります (todo eso fue con la gracia de dios)。

生まれたときから、両親から罪を引き継いでいます (desde que nace trae el pecado de los padres) 大きくなると罪を犯します (cuando crece cometes también)。人々は考えるということでも罪を犯します (sólo con el pensamiento pecan las personas)。わたしたちの最初の両親が罪を犯してから、わたしたちは罪を引き継いでいます (desde que nosotros primeros padres cometieron nosotros lo traemos)。」

(3) 【イエスの子孫】

「わたしたちはイエスの子孫である (nosotros somos descendientes de Jesús) と神が言っています。真実の神は唯一ですが (pero hay un solo dios verdadero)、父と子と聖霊の3つが在ると言われています。」

(4) 【子どもの誕生】

「わたしの両親にわたしを生んでくれたことを感謝しています。ですから、だれかが子どもを一人持つときは、そのことをいいことと考えなければいけません (lo tiene que pensar bien)。今は経済がそれほどよくありませんけれども (ahora la economía no es muy buena)。わたしの子どもが生まれるとき、わたしは子どもを持つことができたことを神に感謝します (el nacimiento de mis hijos le doy gracias a dios)。上の子は公教要理 (la doctrina) を習いに通っています。聖体拝領 (primera comunión) を受けるためです。わたしは子どもたちと一緒に午前のミサに行く日もあります。」

5) わたしの死

わたしの死は神だけが知っていることとしてとらえられている。そして、わたしの死はイエスの死と比べられて小さな出来事として語られる。このことは同時に、イエスの死の大きさ、つまり、わたしたちを救うための死の大きさが語られることでもある。さらに、わたしの死の後に魂の生きつづけることがつけ加えられる。

わたしの死を死後と結びつけて、地獄と天国との関連で述べる事例もある。

(1) 【この世の終わり】

「世界がなくなることはありません (existe la vida del mundo futuro)。人間が死んだらその後さらに多くの人間が来ますから。」

「わたしは死ぬでしょう (moriré)、けれども世界はなくなりません (sin que termine el

mun^{do})。

亡くなるときに、イエスに対して祈ります。毎年、イエスの亡くなった日を祝い記念します。最期を迎えたとき、復活するように、また世界の終わりを見ることができるようにと (al final puedan resucitar y puedas ver el fin del mundo) 。」

(2) 【イエスだけが知っている】

「なぜならみんなある日死ぬのですから。だれもそれがいつかは知りません。神だけがご存知です (sólo dios)。」

(3) 【イエスの死と対比】

「イエスのように死ぬことはできません。わたしたちは病気で死ぬでしょう。わたしが死んだ後、わたしの霊は生き続ける (después de morir mi espíritu sigue vivo)。」

(4) 【たましい】

「誰かが死ななければならぬとしても、誰も死を決定することはできません (nadie puede decidir sobre eso)。死んだ後にはただ霊魂があるだけです (después de eso sólo queda el espíritu)。わたしたちは死んだ者をすべてお祝いします。魂が食べ物を食べ、祈りを聞くために来る (las ánimas vienen a comer y escuchar el rezo) と言われています。」

「魂は生き続けている。」

(5) 【天国と地獄】

「わたしの魂は善い行いをすれば天国に行く、もしそうでないならば地獄に行くと言われています。」

「誰かが死ぬ日です。善いものごとをする人は天国へ行きます。悪いことをする人たちは地獄へ行きます。」

6) 世界の終り

ほとんどすべての人たちが世界の終りを神による最後の審判と結びつけて語る。世界の終りは来る、そこは神が到来する場面であり、生きる者も死んでいる者もあわせて全ての人に対して神による審判が下される。審判はこの世をどのように生きたかによって下される。

世界の終りがこのようにとらえられているので、神の到来が歓びとして、また、審判の後にも世界はありつづけると語られることも少なくない。

(1) 【神の審判】

「世界の終りは来るでしょう (El fin del mundo vendrá)。神が生きている者にも死んだ者にも最後の審判を下されるでしょう (dios dará el juicio final a los vivos y los muertos)。イエスはそれがいつかはご存知ではありません。最後の審判をいつ下すことになるかはご存知ではありません。

未来の世界はあります。世界がなくなることはありません (existe la vida del mundo futuro)。人間が死んだらその後さらに多くの人間が来ますから。」

「世界の終わりは来るでしょう (vendrá)。神が生きている者にも死んでいる者にも最後の審判を下すでしょう (dios dará el juicio final a los vivos y los muertos)。神の到来 (la venida de dios) と言われています。このようにして、神はわたしたちとともに歩くために来てくださる (dios vendrá a qui caminar con nosotros) と、わたしたちは教えられました。善いことをした人たちを選ぶために (para elegir a los que hicieron el bien)。このように『聖書』に書いてあります。」

(2) 【世界はなくなるらない】

「わたしは死ぬでしょう (moriré)、けれども世界はなくなりません (sin que termine el mundo)。世界が終わるときはみんなが死ぬときです。」

(3) 【魂】

「もし世界がこのまま続いてもわたしはもう存在しません、わたしの魂だけが存在します (si el mundo va a seguir pero yo ya no voy a estar y sólo mi alma)。」

「イエスの死後、魂は生き続けている、復活において (sigue el alma en la resurrección)。」

(4) 【悲しい】

「世界の終りはとても悲しい (es muy triste) と思います。すべての人は死ぬでしょう (toda la gente morirá)。わたしはもうそれ以上生きることはできません (no habrá mas vida)。しかし神は死なれることはないでしょう (dios no morirá)。」

(5) 【黒いもの】

「何か黒いもの (algo negro) です。世界は終わりません (el mundo no se acaba)。なぜなら、生命は続く (la vida sigue) からです。誰一人世界が終わることを願いません。しかしそれは神の到来 (la venida de dios) を意味します。」

(6) 【喜び】

「世界の終りは神が到来される (la venida de dios) ときです。生きている者と死んだ者を裁

かれるため (para juzgar a vivos y muertos) にです。と同時に、それは喜び (una alegría) でもあります。世界の終わりは来るでしょう (vendrá)。神が最後の審判を下すでしょう、生きている者にも死んだ者にも (dios dará el juicio final a los vivos y los muertos)。世界の終わりは生きている者と死んだ者を裁くために神が来られることです (la venida de dios para juzgar a los vivos y muertos)。」

IV-1 聖母マリアと幼子イエスの写真

この写真をほぼすべての人はヴィルヘン・マリアと結びつけて語る。ヴィルヘンについての知識はきわめて古いのであるが、何千年という巨大な時間のなかで人びとの内面に深く広く定着している。そればかりかヴィルヘンについての太古の知識は人びとの現実の暮らしの中で意味を持ちつづけ生きられている。そこではヴィルヘンへの深い信仰がさまざまに語られ、はっきりとイエスよりもヴィルヘンに祈るという表現で語られる場合もある。ヴィルヘンはイエスの母であるから、自分たちの願いを子であるイエスに取り次ぐという。「神の母親 (la madre de dios) ですし、神に命をお与えになり (dio vida a dios)、神をお世話なさるからです (lo cuida)。」その結果、いくつもの奇跡を起こすと語られるのである。

この場面は祈りと結びつけて語られてもいる。ヴィルヘンが祈りの大切さを教えているのだという。

また、イエスの誕生とあわせて語られ、ヴィルヘンとイエスの関係が現実の親子関係に移しかえて語られもする。

1) 【ヴィルヘン・マリア】

「ヴィルヘン・マリアです。しかし、イエスと一緒にいるのが誰かは分かりません。天使に仕える永遠のヴィルヘンあるいは救いのヴィルヘンかも知れません。すべての日の朝から晩まで、わたしたちをこのように護ってくださっているとわたしは思います (pienso que así nos cuida a todos desde cada mañana todos los días)。

わたしの家の母のようです (es como nuestra madre en mi casa)。わたしの母は毎日毎日同じ方法でわたしのために祈ってくれています (mi mamá reza por mí y todos los días de igual manera)。ヴィルヘンはわたしたちすべてが神の子でいることができるようにわたしたちのために取り成してくださっている (la virgen intercede por nosotros por todos somos hijos de dios) と信じています。」

【ヴィルヘン崇拜】

「イエスよりもヴィルヘンに対してたくさん祈ります。なぜなら、母親の方が子どもたちを

受け入れているからです (las mamás consienten más a sus hijos)。ヴィルヘンはわたしたちのためにどんなことでも神に対して取り成して下さいます (cualquiera cosa ella intercede por nosotras ante dios)。父なる神とその子イエスの前では、同じくらい祈ります。ですが、わたしはヴィルヘン・マリアの方により大きな信仰を抱いています (yo creo que más en la virgen María)。

わたしは神とヴィルヘンに感謝しています。神とヴィルヘンのおかげで (声の出なくなったわたしが) 声を取りもどすことができたことわたしは考えているのですから (le doy las gracias a dios y a la virgen porque me siento que por ellos es que recupere la voz)。」

2) 【イエスの誕生】

「イエスの誕生です。ヴィルヘンです。みんな喜んでます。みんなイエスを訪ねて来ました。わたしの神を見ています。みんなにとって一つの喜び (una alegría) です。」

「イエスの誕生です。イエスは世界中でとても愛されています (muy querido por el mundo)。イエスの母は喜んでます。わたしは自分の子どもの誕生を神に感謝しています (el nacimiento de mis hijos le doy gracias a dios)。

わたしたちの父なる神、救い主ですから大切です。わたしたちに二つのことを与えてくださった (nos dos dio) からイエスに感謝しています。生命と神への信仰です (una vida y creó en el)。」

「ヴィルヘン・マリア、イエスの誕生、フアン・パウティスタ (Juan Bautista) です。ヴィルヘンが幼子イエスを崇めています (venerando al Niño Jesús)。これはわたしにとって大切です、なぜなら救い主イエスの誕生だからです (es importante para mí porque es el nacimiento de Jesús)。また、わたしはヴィルヘン・デ・グアダルルーペにもよく祈ります (le rezo mucho a la virgen de Guadalupe)。」

「イエスの誕生を思い出します (recuerdo el nacimiento de Jesús)。神の戴冠の時のようです。喜びを意味しています。なぜなら、神がお生まれになったのですから。

ヴィルヘン・グアダルルーペを崇拝しています。なぜなら、神の母親 (la madre de dios) ですし、神に命をお与えになり (dio vida a dios)、神をお世話なさるからです (lo cuido)。」

「赤ちゃんがいるのが分かります。神が生まれたところです。男の人たちが赤ちゃんが生まれたことに対して神に感謝しています (los señores dan gracias a dios por el bebé)。

ここに女性が一人います。

ヴィルヘンが幼子イエスをお生みになられました。なぜなら、ヴィルヘンは神の母ですから (la madre de dios)。わたしたちが行っているすべてのことをヴィルヘンはわたしたちの

ために神にお願い願ってくださるのです (todo lo que hagamos nosotros la virgen pide a dios por nosotros)。神がわたしたちを赦してくださるようにと (él nos perdone)。」

3) 【父と母を思い出すかのよう】

「ヴィルヘン・デ・グアダルーベとその子のイエス・キリストです。みんな好きですが、一番大事なのはこのような日々です (los más importantes esos días)。

母と父を思い出すかのようです (Es como recordar a tu mamá y papá)。

4) 【祈り】

「ヴィルヘンとヴィルヘンの子どもたちが祈っています。病気だから祈っていると思います。病気のお年寄りが一人います。

ですから、このように、わたしたちも祈らなければなりません。そして、神にお願いわなくてはなりません。どのように祈るべきかの実例をヴィルヘンがわたしたちに教えてくださっているのです (un modelo de cómo debemos hacer la virgen nos enseña)。」

5) 【イエスの受難を思い出す】

「イエスの受難を思い出すためにこの絵は大切です (es para recordar lo que sufrió Jesús)。」

IV-2 イエス・キリストの磔刑の写真

この写真はヴィルヘンの写真よりも明らかに人びとの内面により深く広く定着している。その意味づけは罪の償いによる人間の救済である。イエスの行為は最も大切なものを与えることによるイエスの愛であり、その愛は大きいがゆえに自分たちにはそれができない、だからこそイエスの生き方を実例として生きていくことの大切さが語られる。

さらに、イエスの磔刑死を悲しみと同時に歎びと語る。なぜならば、イエスの死は「わたしたちみんなの救いを意味する (la muerte significa la salvación de todos nosotros)」からである。

1) 【磔 償い】

「釘で磔にされたイエスの死です。わたしたちから生まれた罪の償い (él pagó del pecado que nacimos) です。わたしたち世界中の罪人を救うための (para salvarnos al mundo pecador)。

わたしはイエスの死と関係があります (me relaciono con mi muerte de Jesús) 。釘で打

たれて磔にされたときのイエス (cuando Jesús sufrió en el calvario) です。」

「わたしたちの罪のために磔にされたところです。ですから今はたくさんのことを試練として経験しています。わたしたちに命を与えてくださった (nos dio su vida) のですから、また、わたしたちの救い主でおられた (fue nuestro salvador) のですから。わたしにとって大切です。

生命はすばらしい。夜が明けると、わたしたちは大事なことを忘れてしまう日があります。夜が明けたとき、お金がないときもあります。しかし、神はいつもわたしたちの救い主です (pero siempre dios es nuestra salvador)。

もし本当のことを言うならば、神は援けるでしょう。しかし、せきたててはいけません。」

2) 【罪の赦し】

「イエス・キリストの磔 (la crucifixión a Cristo) です。イエスの死 (su muerte) です。これは大切です (es importante)。なぜならば、このことはわたしたちの罪の赦しを象徴しているからです (simboliza el perdón de nuestros pecados)。この写真を見たとき、悔悟 (el arrepentimiento) を思い出します。

ヴィルヘンよりはイエスに対してよりしばしば祈ります (le rezo más a Jesús)。自分が病気のときやいろいろ問題を抱えたときなどに祈ります (cuando estoy de malas y tengo problemas)。また、何かがうまくいったことに対して感謝します (también darle gracias por los logros)。

3) 【磔と愛】

「イエス・キリストが磔にあってるところです。十字架に釘で磔にされました。なぜなら、イエスは、わたしたちへの愛によって、わたしたちのためにご自分の命を捧げてくださった (él dio su vida por nosotros por el amor a nosotros) からです。現在では、誰一人わたしたちのために虐待のすべてに耐えることができません (en la actualidad nadie puede soportar todos los maltratos por nosotros)。父なる神のご意志 (por su voluntad de dios padre) によって (イエスはそれをなさることができたの) です。」

「わたしたちのためにイエスがご自分の命を授けてくださいました (Jesús dio su vida por nosotros)。そしてわたしたちの罪のためにお亡くなりになりました (murió por el pecado)。イエスがわたしたちのためになしてくださったことですけれども、このイエスの生き方を事例としてそれにしたがって生きることはわたしたちにはできません (no podemos seguir su ejemplo a pesar de que lo que hizo por nosotros)。

このことはわたしには大切です。なぜなら、イエスはわたしたちに命を授けてくださったのですから (dio la vida por nosotros)。

病気の時はイエスに祈らなければなりません。イエスはどこにでもおられるのですからイエスの写真を一枚持っていなければなりません (tener una foto porque él está donde sea)。ヴィルヘンよりもイエスに対してより多く祈ります。イエスは直接与えてくださる (él lo da directo) からです。」

「イエスの磔を思い出します。神の歴史 (la historia de dios) です。神がわたしたちのために受難にお遭いになったときのすべてです (sufrió dios por nosotros)。わたしが思い出すのはこれだけです。なぜなら、神はわたしたちのために命をくださいました (él dio la vida por nosotros)。神がなさったことをすることができる人は一人もいません (nadie puede hacer lo que él hizo)。わたし個人としてもそのことをなすことはできません (yo en lo personal no podría)。ですからイエスの磔はわたしにはとても重要です (por eso significa mucho para mí)。

ヴィルヘンよりもイエスに対しての方によりたくさん祈ります。なぜなら神が全能でおられる (el todopoderoso) からです。また、神が唯一の本当の神でおられる (un solo dios verdadero) からです。ヴィルヘンにも祈りますが、イエスほどたくさんではありません。ヴィルヘン・マリアはわたしたちのために取り成しをしてくださいます (María sólo intercede por nosotros)。イエスは直接です (él es directo) 。」

「イエスがわたしたちのためにお亡くなりになったところです。わたしたち罪を負った者たちのために、血を流しながら。

この写真を見ると、わたしはイエスがわたしたちのためにお亡くなりになったことを思い出します (me acuerdo que él murió por nosotros)。善い人も悪い人もイエスは愛されました (bueno o malo él nos quiere)。わたしたちの父なる神です (nuestro padre)。病気にかかったとき、何か良くないことが起こったりしたとき、神に祈ります (le rezamos a dios)。イエスにもヴィルヘンにも同じようにお願いします (pidiéndole a los dos por igual a la virgen y a Jesús) 。」

4) 【喜びと悲しみ 救い】

「イエスの死です。みんな喜んでいると同時に悲しんでいます (todos sienten alegría y tristeza a la vez)。なぜなら、イエスの死はわたしたちみんなの救いを意味するからです (la muerte significa la salvación de todos nosotros)。」

「イエスの死を表しています。それからわたしたちの救いを表しています。イエスがわたしたちに命を授けてくださったおかげで (gracias a él que dio la vida por nosotros)、今わたしたちはわたしたちの救いの機会を持っているのです (ahora tenemos una oportunidad para salvarnos)。

イエスとヴィルヘンの両方に祈りますが、イエスには健康を祈ります。わたしたちを病気か

ら治してくださるように、また、家族が持てるように祈ります。また、農耕がうまくいきますようにとイエスとヴィルヘンに祈ります。」

「イエスの死んだところです。十字架の上でイエスは血を流しながらわたしたちを救ってくださっています (nos salvó derramando su sangre en la cruz)。これはとても大切です (es muy importante)、なぜならわたしたちを救ってくださっているからです (nos salvó)。わたしたちのためにご自分を犠牲にされているからです (el sufrió por nosotros)。夜が明けるときも日が暮れるときも、わたしはイエスに新しい一日を感謝します (cuando amanece y anochece yo le doy gracias por un nuevo día)

イエスにもヴィルヘンにも両方に同じようにお願いします。わたしの仕事と売り上げのために、イエスとヴィルヘンに感謝します。」

III 個別聴取調査結果の全体像

時刻、日、月に対するマニの人々の反応は宗教的な理念との深い関連のなかで具体的に表現されている。彼らは夜明けと夕暮れの訪れを神に感謝する。日曜日は神の日であるから、仕事をしないで神の家である教会に行き、ミサに参加する。12月 は幼子イエス (Niño Dios) のためにポサダをはじめ数多くの祝祭を行うことから、特に重要な月ととらえられている。

この世の始まり、イエス・キリストの誕生、イエス・キリストの死、わたしの誕生、わたしの死という6枚のカードによる時間区分は、創造、罪の赦し、神の愛、蘇り (Resurrection)、救い (Salvation)、天国と地獄、最後の審判などの宗教的な理念によってそれぞれ意味づけされている。

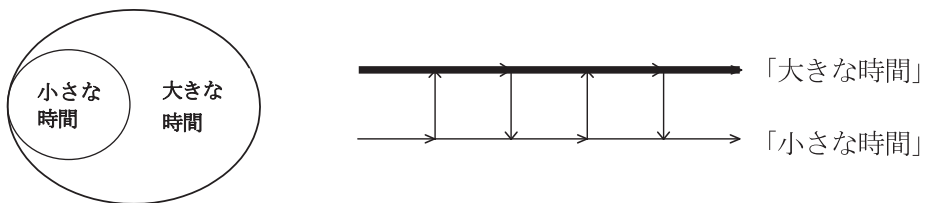
これらの事実、質問紙表ならびに TAT 型有意味写真へのマニのカトリックによる回答と反応と相まって、調査に先立って提示した作業仮説の妥当性と信頼性をある程度実証している。



a と b は無限の時間に関している場合と限定された時間に閉じている場合がある。

自己把握 (Self-recognition) は過去と未来に広がる仕方で行われ、しかも信仰度の深い人の時間感覚はその両方の方向により広く展開している。さらにこのことを上記の分析モデルと結びつけてより厳密に言い表すと、未来の方向よりは過去の方により広がっていることが明らかになった。宗教現象は太古の事実を含み、かつそれらの事実を巨大な時間のなかにおいて持続させているのである。

神話的事実の現実化 (representation of mythological facts)、あるいはまた、「小さな時間」における「大きな時間」の再現 (再活性化 revitalization of Major Time in Minor Time) に関する思考は、マニのカトリックの回答と反応のなかに明確に見い出された。太古の神話的事実は複雑で複合的な現実の総体を社会的に意味づけて構成している。特定の時刻、日、月、6つの時間区分 (上述の6枚のカード) の意味づけは、次にあらためて提示している分析モデルが示しているように、マニのカトリックの時間把握と自己把握が「大きな時間」と「小さな時間」を通じてなされており、かつまたその場面では、儀礼慣習や祝祭などの社会的活動への積極的参与の傾向を強くもつことが証明されている。



マニのカトリックによる回答ならびに反応においては、祝祭や年中行事への高い評価と積極的な参与が優位を示している。そしてその場面では、十字架、聖像などのカトリシズムにとって重要な象徴の解釈が量的に大量であるだけでなく、その内容が詳細でかつ正確であり、それらの解釈が現実の複雑で複合的な現実を意味づけている。

と同時に、「小さな時間 (Minor Time)」よりもむしろ「大きな時間 (Major Time)」により高い評価がなされていることが明らかになった。マニのカトリックの回答と反応は、祝祭やミサなどのような太古の事象の現実への再現、日の出や日の入りなどの個々の自然現象を「大きな時間」における事がらとして神に感謝することを通じて、「小さな時間」における希望の持続を生み出していることを表している。

これらの場面では、宗教的な理念や教えがマニのカトリックによる自己把握、太古の神話的事実の現実化、「小さな時間」における「大きな時間」の再現 (representation) と再統合 (reintegration) を可能にしているのである。

以上述べた事実は有意味写真 (IV -1 聖母マリアと幼子イエス IV -2 イエス・キリストの磔刑) へのマニのカトリックによる反応においても見い出される。

聖母マリアと幼子イエスの写真への反応は、宗教が象徴を通じてその太古性を何千年という巨大な時間のなかでどの程度持続させることができるかを表している。大部分のマニのカトリックによってこの写真は聖母マリアと結びつけられた。聖母マリアに関する知識と宗教的な教えが、きわめて古く、時間の経過とともにマニのカトリックの内面に深く定着していることを証明して

いる。そして、人々の心の中に根を下ろした聖母マリアをめぐる知識が彼らの暮らしのすべての面にさまざまな意味を与えているのである。聖母マリアへの信仰は、特に奇跡 (milagro) を中心として多様な仕方で語られるが、そこではイエス・キリストよりもむしろ聖母マリアに祈ると言う人が決して少なくない。なぜなら、それらの人々の言うところによれば、聖母マリアはイエス・キリストの生みの母であることから、「イエスとわたしどもの取り成しをしてくれる存在 (intermediary) である」からである。「聖母マリアの取り成しを通じてはじめて人々の祈りはイエス・キリストに届く」と考えられている。これに対して、イエスに祈った場合はイエスが「直接与える (él lo directo)」。

マニのカトリックでイエス・キリストの磔刑を知らない人はいないであろう。彼らはその磔刑を過去に犯した罪の償い (atonement for the sins in the past) と人間の救い (salvation) との連想において語る。自分たちが生きているのも、また、新しい生命が生まれるのも、さらにもどのように生きていくべきかを知ることができるのもすべてイエスの磔刑のたまものなのである。

宗教現象は太古の事象と巨大な時間のなかで持続させる。この論点は宗教的文化統合という作業仮説概念 (working hypothetical concept of religio-cultural integration) の核心である。

イエス・キリストの磔刑はマニのカトリックによって人類への愛と解釈されている。この解釈は広く人々の間に定着している。イエス・キリストの愛は人間が考えることができる範囲をはるかに超えており、人間がそれを理解することなど決してできない。それ故に、彼らはイエス・キリストが磔刑によって人間に示したように生きることにより高い価値づけをする。そして、磔刑を過去の罪の赦しならびに人類の救いと連想において語る。なぜなら、そのためにイエス・キリストは死んだと考えているからである。それ故に、マニのカトリックは磔刑を大きな悲しみと同時に大きな喜びと語る。イエス・キリストの死は「わたしたちみんなの救いだから」である。

おわりに

宗教は社会や文化の中心に位置していて、その或る部分を強く、また或る部分を弱く色づけている。宗教はそれを信仰する人たちが、現実の暮らしのすべての面において、実際に経験することを解釈し意味づけ (adjust)、それらを踏まえて行動するときの拠りどころである。そして、自己把握や生きがいというような極めて重大な認識 (cognitions) に対しても、宗教は他の人たちと共有できる一つの体系立った意味を与えているのである。

それゆえに宗教は太古の要素を何千年という巨大な時間のなかで持続させてきている。と同時に、宗教の理念と宗教行動は国境を越えて広く世界に定着し、他の人たちと共有できるよいこと (bonum commune) の実現をめざして働いている。宗教のそなえるこの太古性と普遍性は、理念に

よる立て直し (adjustment)、つまり、神や神聖な存在にまつわる教えや伝統によって現実を再構成する方法と態度とともに非常に重要な論点である。宗教はその本性としてこの世の合理的な思考および行動と絶えず強い緊張関係を保つが、そのことの真の理由はここに見出すことができるといえよう。

ところで宗教意識と宗教行動は集団によって共有され分有 (participate) されている。一人の宗教は存在しない。宗教はつねに他との関係のなかで集団として営まれていく集合表象 (représentation collective) である。そこで言うまでもなく宗教現象は集団の断面でさまざまな視点から科学的方法によって分析されなければならない。しかし、宗教が現実には個の内面の奥底に深く関わり、自然、生命、人間の営みの持つ根本的な意味を与えることにより個を心の底から突き動かしている事実を注視するならば、単に集団の断面での宗教現象の分析にとどまるべきではないであろう。カトリシズムにおいては神は一人ひとりにことばで語りかけてくる。そのことばをカトリックは神との契約という関係のなかで受けとめて聴き、そのことばに対して一人ひとりが責任をもって応答していく。その応答のすべての過程は、唯一・絶対の人格神である神の働きを一人ひとりが体験し内面化しようとする途のりに他ならない。神のことばにできる限りよく応答することによって、毎日の生活が意味づけられ秩序づけられるのである。であれば、宗教意識と宗教行動の共有と分有の実態をさらに厳密に把握するために、集団において共有され分有されている具体的な姿を個人の断面でとらえ直すことは意味のあることであろう。同一集団や家族においても、個人の断面で宗教の共有と分有の実態を克明にとらえ直していけば、そこには宗教に対する理解や態度の凹凸が見い出せると考えられる。その凹凸を客観的な方法を通じて正確に取り出すことは、宗教による意味づけ、すなわち宗教による個人や社会の立て直し (adjustment) のより具体的な姿を発見することである。この方法によって導き出される結果は、宗教意識と宗教行動のさらに高度で厳密な理解を生み出すと考えることができよう。

人間に関する事象は、宗教をも含めて、個別具体的には厳正に左右対称とか完全に平等とかはありえない。とすれば、個別の具体的な現実をも踏まえつつ、集団による共有と分有の全体像をとらえることの方が有効であると筆者には考えられる。この小論はようやくその試みの出発点に立ったにすぎない。個人の断面による宗教現象の厳密な分析は別稿で提示し、能うかぎりの厳しい批正を仰ぎたい。

注

- 1) 本稿で取り扱う調査結果およびそれらに関連する諸事実は次に掲げる論文に初出している。詳細は各論文を参照されたい。

Harukazu Nakabeppu

- 1985 *Hot/cold Dichotomy and Men (Medicine Man= Priest) in Mani, Yucatan. Study of Catholic Culture in the South Mexican Villages.* pp. 339-377
- 1987 *Men (Medicine Man= Priest) and Ch'achac (ritual for rain) in a Maya-yucatecan Village, Mani. Study of Catholic Culture in the South Mexican Villages.* pp. 225-254
- 1989 *Men (Medicine Man= Priest), Ritual Practices and Padrinazgo/ Compadrazgo in Mani. Religion, Law and Practical life in the South Mexican Villages.* pp. 129-150
- 1991 *Images of Saints and Diseases in a Mayayucatecan Catholic Community, Mani. Bulletin of the Institute of Comparative Studies of International Cultures and Studies.* Vol. 10 pp. 91-123
- 1993 *A Marriage form (pudz) in a Maya Village, Mani. Bulletin of the Institute of Comparative Studies of International Cultures and Studies.* Vol. 32 pp. 210-218
- 1995 *Ritual Kinship (compadrazgo and padrinazgo) in a Maya-yucatecan Catholic Community, Mani. Chiikisogokenkyu* Vol. 5 pp. 53-64
- 1996 *The Structure and Function of Ritual Kinship in a Maya-Yucatecan Catholic Community, Mani. Chiikisogokenkyu* Vol. 6 pp. 77-96
- 1996 *Miracles in a Mayanyucatecan Catholic Community, Mani. Bulletin of the Institute of Comparative Studies of International Cultures and Studies.* Vol. 17 pp. 111-152
- 1999 *Miracles in a Mayayucatecan Catholic Community, Mani. Religion, Region and Family.* pp. 107-172
- 2000 *Altars and Images in Mayayucatecan Catholic Community, Mani. Journal of Nishi Nippon Association for the History of Religions.* No. 22 pp. 15-26
- 2000 *Marriage Form in a Mayayucatecan Catholic Community, Mani —with special reference to Pudz— Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities.* Vol. 8 No. 1 pp. 205-220
- 2001 *Aspects of the Family of a Mayayucatecan Catholic Community, Mani. Journal of Nishi Nippon Association for the History of Religions.* No. 23 pp. 39-51

- 2002 *Some Aspects of Social Structure of a Mayayucatecan Catholic Community, Mani.*
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol. 9 No. 1
pp. 137-152
- 2002 *Ritual Kinship and ejido in a Mayanyucatecan Catholic Community, Mani.*
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol. 10 No. 1
pp. 217-233
- 2008 *Some Aspects of Family Structure of a Mayayucatecan Catholic Community, Mani.*
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol. 16 No. 1
pp. 227-248
- 2009 *Some Aspects of Social Structure of a Mayayucateca Catholic Community, Mani*
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol. 17 No. 1
pp. 173-190
- 2010 *Religious Attitudes Towards Altars and Images in a Maya-yucatecan Catholic*
Community, Mani.
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol. 18 No. 1
pp. 131-143
- 2011 *An Experimental Method for the Study of Time Perception at the Individual*
Level—with Reference to a Case Study in a Catholic Community Mani, Yucatan,
Mexico
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol. 19 No. 1
pp. 107-124
- 2012 *An Experimental Method for the Study of Time Perception at the Individual*
Level—with Reference to a Case Study in a Catholic Community Mani, Yucatan,
Mexico
Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol. 20 No. 1
pp. 109-144
- 2013 *A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico*
—An Introductory Study of Experimental Methods for Analysis of Time
Perception at the Individual Level of a Mayayucatecan Catholic Community,
Mani (2) — Bulletin of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities.
Vol. 20 No. 1 pp. 135-166

中別府 温和

1985年 「メリダ周辺地域マニにおける「熱い」/「冷たい」二分法とメン(呪医=祭司)について」

- 『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究(Ⅲ)』 pp. 339-377
- 1987年 「ユカタンの一村落マニにおけるメン(呪医=祭司)と雨乞いの儀礼(cha'chac)について」『南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究(Ⅳ)』 pp. 225-254
- 1989年 「マニにおけるメン(呪医=祭司)と儀礼慣習と擬制的親子関係(padrinazgo-compadrazgo)」『南部メキシコ村落における宗教と法と現実』 pp. 129-150
- 1991年 「マヤ・ユカテカ地域の一村落マニにおける聖像と病気」
『比較文化研究』10輯 pp. 91-123
- 1993年 「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける婚姻形態について—駆け落ち婚(pudz)の事例を中心に—」『比較文化研究』15輯 pp. 123-149
- 1995年 「マヤ・ユカテカの一村落マニにおける儀礼的親子関係」『地域総合研究』5号 pp. 53-64
『マヤ・ユカテカの一村落マニにおける奇跡について(1)—メンの病気治療の事例を中心に—』『比較文化研究』17輯 pp. 111-152
- 2000年 「マヤユカテカの一カトリック村落マニにおける祭壇と聖像について」
『西日本宗教学雑誌』第22号 pp. 15-26
- 2001年 「マヤユカテカの一カトリック村落マニにおける家族に関する一側面」
『西日本宗教学雑誌』第23号 pp. 39-51
- 2007年 「宗教の太古性と残存性に関する一考察—マヤ・カトリック村落マニにおける口頭伝承を材料として—」
『宮崎公立大学人文学部紀要』第15巻第1号 pp. 195-232
- 2008年 「メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究—マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける奇跡を材料として(1)—」
『宮崎公立大学人文学部紀要』第16巻第1号 pp. 191-225
- 2009年 「メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究—マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける奇跡を材料として(2)—」
『宮崎公立大学人文学部紀要』第17巻第1号 pp. 137-172
- 2010年 「メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究—マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニにおける駆け落ち婚(pudz)を材料として—」
『宮崎公立大学人文学部紀要』第18巻第1号 pp. 101-130
- 2011年 「メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究—マヤ・ユカテカのカトリック村落マニの空間感覚分析のための序論的考察—」
『宮崎公立大学人文学部紀要』第19巻第1号 pp. 79-106
- 2012年 「メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究—マヤ・ユカテカのカトリック村落マニの空間感覚分析のための序論的考察(2)—」

『宮崎公立大学人文学部紀要』第20巻第1号 pp.73-108

- 2013年 「メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究
—マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニの空間感覚分析のための序論的考察(3)—」
『宮崎公立大学人文学部紀要』第21巻第1号 pp.91-134

- 2) 古代マヤの共有地ならびに集落形態に関しては、次の考古学・歴史学の史資料を参照されたい。

Wendy Ashmore edited

1981 *Lowland Maya Settlement Patterns*.

University of New Mexico Press. pp.361-364

Joyce Marcus

1973 *Territorial Organization of the Lowland Classic Maya*.

Science. Vol. 180. pp. 911-916

Michael D. Coe

1965 *A Model of Ancient Community Structure in the Maya Lowland*.

Southwestern Journal of Anthropology. Vol. 21., No. 2 pp. 97-114

1987 *The Maya*. Thames and Hudson. p.164

Frauke J. Riese

1981 *Indianische Landrechte In Yukatan Um Die Mitte Des 16. Jahrhunderts*.

Hamburg. ss. 1-222.

R. E. W Adams and Woodruff D. Smith

1981 *Feudal Models for Classic Maya Civilization*.

University of New Mexico Press. pp. 335-349.

Richard A. Thompson

1974 *The Winds of Tomorrow*. The University of Chicago Press. pp. 22-35.

1974 *Aires de Progreso*. INI. Mexico. pp. 37-52

- 3) 本稿において筆者が提示する分析モデルは次に掲げる引用参考文献を参照して構成した。

Saint Augustine

1956 *Confessions*, 2 vols, 7ed., Pierre de Labriolle. pp. 421-422

Nobukiyo Nomura

1998 *Religion, Society and Culture*. Kyushu University Press. pp. 117-118

1996 *Religious Varieties of Catholic Community Tlajomulco in Mexico*.

Bulletin of the Institute of Comparative Studies of International Cultures

and Studies. Vol. 17 pp. 1-43

Bin Kimura

1981 *Self, Span, Time*. pp. 122-171

1982 *Self and Time*. pp. 63-172

Jun Miyake

1989 *Folklore of Religion*. pp. 93-94

Shigeru Matsumoto

1981 *The thought and Psychology of Motoori Norinaga*. pp. 85-102

Max Weber

1920 *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*. I

J. C. B. Mohor Tubingen. ss. 276-536

1920 *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*. II

J. C. B. Mohor Tubingen. ss. 401-442

1920 *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*. III

J. C. B. Mohor Tubingen. ss. 162-165

Claude Lévi-Strauss

1958 *Anthropologie Structurale*. Plon. pp. 205-226

E. R. Leach

1961 *Rethinking Anthropology*. University of London. The Athlone Press.

- 4) 神話的時間の現実化に関して筆者が提示する分析モデルは、次に掲げる引用参考文献を参照して構成した。

Émile Durkheim

1968 *Les Formes Élémentaires De La Vie Religieuse*. pp. 428-548

Claude Lévi-Strauss

1958 *Anthropologie Structurale*. Plon. pp. 205-226

Leach, E. R.

1976 *Culture and communication*. Cambridge University Press. pp. 33-36

1961 *Rethinking Anthropology*. University of London. The Athlone Press.

Shigeru Matsumoto

1981 *The thought and Psychology of Motoori Norinaga*. pp. 85-102

Nobukiyo Nomura

1988 *Religion, Society and Culture*. pp. 117-118

Max Weber

1920 *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*. I ss.276-536.

1920 *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*. II ss.401-442.